ISSN 1344-4727

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands

多島研だより

No. 43　鹿児島大学多島圏研究センター　2002年９月

インドネシアに芽生える地域研究の方向

青山　亨

（多島圏研究センター）

日本における東南アジア研究はすでに地域研究の一分野として長い地歩を築いている。その一方で東南アジアにおける地域研究はようやくその端緒を見たところである。インドネシアでは、インドネシア科学院の中に地域研究のセンターが設けられたばかりである。通称「リピ」（LIPI ＝ Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia、英訳 Indonesian Institute of Sciences）と呼ばれているインドネシア科学院は 1967 年に設置された大統領直轄の国家機関である。インドネシア政府の科学技術に関する政策の立案と調整をおこない、海外の研究者との共同研究の窓口となるばかりか、科学院自体が社会人文科学、自然科学、工学、科学基幹開発などの分野にわたる研究者を擁する大規模な研究機関である。大統領直轄ということで予算も通常の国立大学と比べると恵まれている印象がある。

この LIPI の社会人文科学部門の一部を再編して昨年創設された新しい研究センターが地域研究センターである。Pusat Penelitian Sumber Daya Regional (Reseach Center for Regional Resources) という正式名称からは天然資源の研究をおこなう機関のような印象を受けるし、実際、海外の企業から問い合わせが来たりするそうだが、LIPI に国際関係を扱う部局がすでにあることを配慮した命名とのことだ。実態から言えば、地域研究センター（Research Center for Area Studies）に他ならない。もともと 1993 年に始まった東南アジア研究プログラムを核として創設されたもので、東南アジア、アジア太平洋、ヨーロッパという三つの地域における社会、文化、政治、経済について、学際的な視点から、比較的かつ包括的な研究をおこない、さらに、インドネシアの視点から既存の社会理論を見なおし、政府に対しては政策立案の素材を提供するという。

実は、このような研究センターが今になって作られたきっかけは、1997 年のタイの金融危機に始まったアジア経済危機である。グローバル化はスハルト時代のバブル期のキャッチフレーズだったが、そのスハルト政権が国境を越えて襲ってきた金融危機の波に呑み込まれて崩壊したのは皮肉な事件だった。実は、このときになって初めてインドネシアの人々は同じ東南アジアという地域にありながら他の諸国の実情についてほとんど関心を払っていなかったことに気付かされたのだという。このような背景で始

この号の内容

インドネシアの地域研究	1
研究会	2
多島研海外調査	10
海外出張・研修の記録	14

まったインドネシアの地域研究には、国家という単位で構成された地域の中における各国の現状を研究するという意識が強い。東南アジアに関して言えば、もっと隣国を知ろうという発想である。これは、国家や国境という枠組みを外して地域（その単位とそのまとまりの可能性）を考えようという意識が強い日本の地域研究とはずいぶん異なる。

８月14日に地域研究センターの創立一周年を記念したセミナーが開催され、私も招かれてセンターの東南アジア研究を担当するイ・クトゥット・アルダナ博士とともに報告をおこなった。私は「地域研究と歴史」という題目で、歴史の視点から地域を国家という単位から解き放ち相対化する必要性を述べ、クトゥット博士は「東南アジア研究：その諸問題の重要性と未来への展望」という題目で海外における東南アジア研究を総括した。各国の東南アジア研究の性格が政治的配慮に影響されたいう見解には賛成できたが、地域研究が各国情勢の研究であればよいという姿勢には疑問を感じざるをえなかった。あえてこのような姿勢に理由を求めるとすれば、国民国家の発展が不十分な段階にあっては、国家単位の形成が至近の目標であり、国家以前の地域単位は克服されて行かなければならないという事情によるものかもしれない。しかし、地域が国家という単位に規制されないより動的な対象であることには変わりない。

人間の社会の営みを見ようとするとき、空間と時間という２つの軸が織り成す座標のうえにその営みが定位されなければならない。時間は「過去」「現在」「未来」、あるいは、「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」といった単位で区切られる。同様に、空間も「地域」「領域」「地方」「地区」といった様々な単位に分けられ、「地域」といってもその切り取り方は一様ではない。大小様々な地域区分が存在する多重層的な見方をする必要があるだろう。さらに、地域区分を設定する際にも、地球上に切り取られたある空間の特徴を追求する方法もありうるし（東南アジア地域研究など）、地球上のいくつもの場所に存在する、ある共通のパターンをもった地域の様相を分析する方法もありうる（多島域の研究など）。むろん、この二つの方法は互いに補い合うことができるものだ。多島圏研究センターの場合には、鹿児島以南の国内の島々、ミクロネシア、東南アジア島嶼部を具体的な対象地域としつつ、世界に広く存在する多島域一般に適用できるような研究をおこなうところに意味があるように思われる。

一方のインドネシアは、国の面積の 81%が海であり、その中に 17,500 もの島々を抱える典型的な多島世界である。この中に大小の多島域が存在し、さらに、その多くが海を通じて隣接するマレーシア、フィリピン、オセアニアの多島域とつながっている。今後、多島圏研究センターとインドネシアの研究者とが共同して研究する道を作り出すためには、インドネシアの地域研究の中に、国家よりもさらにミクロな単位としての多島域、あるいは国境という枠組みを越えた単位としての多島域への関心を育てて行くことが大切であると思われた。

研　究　会

多島域フォーラム「島に生きる」
シンポジウム・外から奄美の文化を見る

2002年2月23日（土）午後1時・5時

鹿児島大学農学部連合大学院
企画、座長　桑原季雄（鹿児島大学法文学部）

1) 口承説話からみた徳之島の「風土」— 徳之島町の「島口・島唄大会」をめぐって —

鈴木寛之
（琉球大学法文学部）

徳之島町では「郷土文化の伝承を図るために、島口・島唄の発表と鑑賞の場を提供し、もって地域の文化に対する関心を高めるとともに、町民相互の親睦と豊かな心情を培う」ことを目的とした「島口・島唄大会」が町教育委員会の主催で毎年開催されている。地域に伝わる説話や民謡、以前の生活ぶりを回顧する談話などが「島口」で披露されるなかで、地域の人々が語り継ごうとしている島の「風土」とはどのような内容なのか紹介する。

2) 奄美における民俗宗教の現在—奄美大島名瀬市小湊地区を例として—

徳丸亞木
（鹿児島大学法文学部）

本報告では、「シマ」として自律的なコスモロジーを構成してきた奄美大島の島嶼社会—名瀬市小湊地区を例として、民俗宗教にかかわる住民のアイデンティティ形成のありかたと、その変容過程を紹介した。小湊地区では、地区の伝統的儀礼体系、集落内の神社・墓地・聖地など伝統的宗教施設、カソリック教会など後時的に受容・成立した宗教施設、ユタなど宗教者の活動などの諸点について民俗誌的調査を行った。ノロ祭祀については、すでに伝承が途絶しており、その点では伝統的なシマの宗教的世界観は解体過程にあると言える。

集落民のアイデンティティ形成上、特に留意すべき点は、シマの共同墓地にある三カ所のモーヤ（喪屋か）を中心として、三つの講集団（中間講・赤中講・保呂講）が形成されている点である。モーヤは珊瑚塊を集めて作られた円形の墓で、内部には、瓶に納められた完全人骨の廻りを多くの頭骨が取り巻く形で収蔵されており、戦で死亡した武士達の遺体、シマを襲った海賊達の遺体、あるいは彼らと戦って戦死した住民の遺体、または疫病による死者を葬ったなどと伝えられる。集落の家々は、家筋によってこれらモーヤの講集団の何れかに帰属し、そこで旧暦９月９日以降のカネサル（庚申）にモーヤの清掃を行い集会所でウヤホジマチリ（先祖祭）を行う。このモーヤ集団は基本的に父系継承により構成各戸が受け継がれているが、構成各戸間の序列関係は明確ではない。集落を三分し、それぞれに家筋で祭祀集団（講集団）が構成されているところから見て、湊集落が形成される以前の三集落からの出自集団がその始祖を祭祀したものとの推測も出来るが、各家々の先祖祭に際しては特にモーヤへの儀礼は行われておらず、講集団レベルのモーヤ祭祀と家レベルの先祖祭祀とは分断されている。各家における位牌承継は、表面的には長男子相続の形態をとるが、実際には、シマに居住し両親の老後の面倒を見た子を男女を問わず継承者とする傾向があり、この点では、モーヤ祭祀に見られる父系継承原理と、家レベルの祖先祭祀に見る位牌継承原理とに相違が見られる。全体的な傾向として、シマの伝統的な宗教的世界観は解体しつつあると言えるが、このモーヤを中心として、旧来からの住民のアイデンティティは維持されており、シマとしての自律性は現在でも保たれている。

しかし、ノロ制度の解体後は、中心となる司祭者を失ったシマの宗教的世界に、外部からの成立宗教や新宗教が受容され、個人レベル、あるいは家レベルでは、それらの成立宗教、新宗教に基づく宗教的世界観の変容が生じつつあると指摘できる。

3) 奄美の風土と住まい

土田充義
（鹿児島大学工学部）

日本の伝統的住まいもモダン住宅も風土と結びついている。人間は住まいで人生の半分を過ごし、その住まいで心身の回復を求め、そのため心地よさつまり快適性の追求が行われている。住まいを夏向きに造ることは南国では特に必要で、開放的な縁側は無くてはならなかった。住む人々が快適性を求め、接客空間を重要視することは住まいにとっては内的要求であった。今後とも住まいに快適性を求め、災害に強い住宅が建設されるようになれば、一層増すにちがいない。鉄筋コンクリート造に住む主人は自宅が非常に気に入って、家にいる時間を増やし、終に職場を止めてしまった。その住まいを拝見したが、通風を配慮し、一部の天井を高くし、光の入れ方など巧みであった。どんなにモダンであろうとも地域の特性を配慮せずには快適性を追求できない。地域の特性つまり風土をしっかり見つめないと、満足できる住まいとはならないことが分かる。その風土は人間を育んできた。すばらしい風土といえる。一方、厳しい風土はつまり台風・地震・氾濫は住まいを破壊する。この破壊力に先達はどんな知恵で対応してきたであろうか。そもそも対応の仕方には二種類ある。一つは真正面から力に対応する方法である。先達はこの方法を選ばなかった。第二の方法つまり外力を上手に流して守った。例えば、屋根を低くして、軒を周囲の石垣の高さに合わせて、台風を素通りさせた。住まいを正方形にすることで、バランスをよくして、地震にも強くした。床下を高くして、通風と同時に氾濫による床上浸水を防いだ。その高い床下に太い丸太を柱間に渡し、風で住まいが持ち上がらないようにした。類焼を逃れるために、高倉群を住まいから離した。また、住まいや高倉の周囲に燃え難い樹木を植えた。奄美の高倉には独特の工法、引張て軒桁を支える。このような創意工夫を探ってみた。

公開講座・長寿を考える

2002年2月16日（土）午後2時・4時半

鹿児島大学総合教育研究棟201講義室

コメンテーター　田畑 千秋（大分大学教育福祉科学部）

企画協力　波多野浩道（鹿児島大学医学部）

1) 健やかな長寿のために

野地有子
（札幌医科大学保健医療学部）

はじめに：わが国は、世界の中でも最も長寿の国となり、中でも沖縄を中心とした多島域が注目されている。沖縄には、恵まれた自然環境に加えて、食事を中心とした生活のしかたや、長寿者の生活を支える社会のしくみと長寿文化があるといわれている。そこで「長寿かよりよい人生か？」「何故長生きするのか？」などを手がかりに、健やかな長寿のためのポイントを整理し、最近の沖縄の長寿に関する研究成果などを踏まえて、元気に長生きするためにはどのような事が大切なのか検討した。また、アメリカの元気な高齢者の生活をビデオで紹介しながら、生活習慣や文化の違う国の人々は、どのように健やかな長寿のための努力をしているのか参考にし、私たちの生活をふりかえる機会とした。

長寿かよりよい人生か？：エジプトやギリシャ、ローマ時代は、長生きを勧めるというよりは、まず老化を遅くすることに関心がそそがれ、食べ物がその鍵となることが記録されていた。より良く食べることが、長寿ももたらした。

機能からみた年齢：機能からみた年齢は、ホルモンの変化と調整からみることができる。更年期は女性ホルモンの急激な減少による体調の変化として注目されているが、近年は男性更年期についても検討が

始まっている。50歳前後の更年期に、ライフスタイル（食事、運動、休養、明日を迎える心構えなど）を見直すことは、健やかな長寿のための鍵となる。

沖縄における社会環境と長寿に関する研究から：沖縄の長寿村における高齢者の調査から、長寿には、他者との共生・感謝の念を維持しつつ自然体で生きるといった精神的自立と安定性に加えて、運動機能の維持と、社会とのかかわりを促すことが大切であるといえる。

米国の高齢者の例：米国カリフォルニア州サンディエゴで行われている高齢者のための運動教室“フィーリング・フィット・クラブ”の参加者は、多くが80歳以上である。高齢者のための昼食サービスにも参加する者が多く、彼らは、沖縄の高齢者と同様に、精神的自立と安定、運動機能の維持、社会とのかかわりを促進する努力をしていた。

2) 沖縄に学ぶ「長寿７カ条」

宮城重二
（女子栄養大学栄養学部）

沖縄は 90 歳及び 100 歳長寿者が多い、平均寿命が長いという点から、疑いもなく日本一いや世界一の長寿地域だといえる。ここで、その長寿の秘訣を7カ条にまとめてみた。

１．肉類を過不足なく食べる：沖縄の肉類の摂取量は一人一日約 90 ｇである（全国平均の３割増）。欧米人は肉類の多食（動物性脂肪の取り過ぎ）で心疾患が多いが、沖縄の心疾患の死亡率は全国平均の約7割という低さ。沖縄の肉類の食べ方は適量といえる。しかも、沖縄では豚肉を多食するが、その食べ方は肉を塊のまま脂やあくを取りながら長く煮込み、赤肉や骨付き肉がお箸で切れるほど柔らかくするのがコツ。歯の弱い老人でも肉料理を喜んで食べる。

２．豆類特に豆腐を肉類とバランスよく食べる：豆類の摂取量も一人一日約 90 ｇであり、肉類とバランスよく食べている。

３．野菜や海草類（特に昆布）も多く食べる：野菜等は肉類や豆腐と一緒にサッと炒める「チャンプルー」で食べるのが一般的。また、汁物も食材を栄養的にうまく取り混ぜて具だくさんにして食べる。一皿及び一碗で栄養バランスが良い食べ方をする。

４．塩分の摂取が少ない：野草・薬草も含め野菜が年中利用できるので、漬物を食べる習慣がもともとない。

５．運動や労働を続け年中体を動かす：年中温暖であるので、閉じこもりが少ない。

６．「テーゲー主義」で心のゆとりをもって生きる：自分も相手も追いつめないで「たいがいにしようよ」「人生なるようになるさ」といった考え方が心のゆとりとなって、ストレスが少ないといえる。

７．「共存社会」「ヨコ社会」「ホンネ社会」を生きる：タテの序列にこだわらず、ホンネが許せる沖縄社会はストレスが少ないといえる。

多島圏研究センター研究会

第28回

2002年1月28日
総合教育研究棟201講義室

デング熱・デング出血熱

森田公一
（長崎大学熱帯医学研究所）

デング熱・デング出血熱は蚊で媒介されるデングウイルス感染による急性ウイルス感染症であり現在、ほとんどの熱帯地域の国々において流行を繰り返しており、その対策は熱帯地域における保健衛生上の重要課題の１つである。世界保健機関（WHO）は世界人口の約半分にあたる 25 億人の人々が感染の危険がある地域に居住し毎年 2000 万人におよぶ感染者が発生していると見積もっている。デングウイルスの

主たる媒介蚊は熱帯シマカ（*Aedes aegypti*）であり、この蚊がヒトの生活の場（都会や集落）で増殖する習性があること、およびヒト-蚊-ヒトのサイクルでウイルスが増幅・媒介される事からデングウイルス感染症は熱帯地域の人口密集地において猛威をふるっておりアジア、中南米、カリブ海諸国、太平洋諸島の国々で患者数・流行地域ともに増加・拡大している。デングウイルスには4つの血清型（1型、2型、3型、4型）ありヒトに感染した場合、比較的穏やかに経過する発熱・発疹を主症状とするデング熱と重症で致死的な出血性疾患であるデング出血熱という２つの病型を示す。デング出血熱は２度目の感染で発症することが多いがそのメカニズムについてはよくわかっていない。またほとんどのデング出血熱はデングウイルスの2回目の感染で発症するのであるが、出血熱の発症機序はいまだ不明のままであり、有効なワクチンもなく予防方法はコミュニティーレベルでは蚊の防除、個人レベルでは蚊に刺されないような衣服や、蚊忌避剤の使用をすることのみであり、デングの対策は行き詰まりを見せているのが現状である。多島圏研究センターの活動地域である太平洋の諸国においてもデングは極めて重要な感染症であって、今後とも感染者と重症者の数は増加することが予測され、デングとその媒介蚊のサーベイランス体制の改善と媒介蚊防除対策の強化が必要である。

第29回

2002年3月26日

総合教育研究棟201講義室

デンマークの小母ちゃんに魅せられて

中野和敬

（鹿児島大学多島圏研究センター）

1960 年代後半のことであるが、植物生態学を専攻する大学院生であった小生が農業地理学のゼミに出席していた時、デンマークの小母ちゃんが書きおろしたばかりのあまり厚くはない本を読まされた。その小母ちゃんの名は Ester Boserup と言い、1970 年代になってようやく考古学者、人類学者、地理学者の中に彼女が提唱したモデルの熱烈な支持者となる研究者がかなり現われた。彼女のモデルが小生を驚かせ、また、魅了したのは、彼女が、焼き畑農業が大量の補助エネルギーを投入する近代農業体系を別にすれば、ほかのどの耕作体系と比較して、最も労働生産性が高いと喝破したからであった。この見解は当時も、また、いまだに現在でも一般常識に真っ向から対立するものである。小生は、彼女のモデルの出発点となるこの仮説が実証できるかどうかに最大の関心を抱き、今まで学問的努力を重ねてきた。

その問題で実測すべきは耕地面積あたりの労働投入量と収穫量であるが、前者のばあい、ストップウォッチを片手に、現地にへばりついて農民が生産活動をしている最中ずっと一挙一動を観察するのが理想的である。このような研究を time and motion study という。小生自身焼き畑民を相手に time and motion study を実行してきたが、信頼に足る定量的なデータは世界中を見渡しても、極めて数少ない。このような事情から、小母ちゃんの仮説が本当かどうかは今もって、学界でも結論が出ていない。小生は、自分自身の実測値をもとに、ばあいによっては、焼き畑での陸稲生産よりも、隣接した小規模の水田稲作の方が、労働生産性がはっきりと高いのではないかという見解を世界的に見ても最初に表わした。この見解を支持する研究は最近増える傾向にある。しかし、大局的、また、長期的に見ると、彼女のモデルはかなり現実性があり、やはり、魅力的である。ただ、彼女が強調した、自分の理論はマルサス理論から真っ向から対立するものであるという主張は、鶏か卵かの問題であり、システム的に考えると、必ずしも互いに矛盾するものではないという考え方が近年は一般的である。その先駆的なシェマのひとつは小生自身が提示した。

第30回

2002年5月27日

総合教育研究棟201講義室

南西諸島における亜熱帯森林群集における林木種多

様性について ― 沖縄島北部（通称ヤンバル）地域の森林の現状と保全 ―

久保田康裕
（鹿児島大学教育学部）

鹿児島県から沖縄県にかけて連なる南西諸島には、亜熱帯林が分布している。世界的に見ても亜熱帯林が植生帯として分布している地域は以外に少ない。なぜならば熱帯と温帯の間に位置する北緯 20 ～ 30 度帯は、多くの場合乾燥地帯で、あまり森林は発達していないからである。その点南西諸島の気候は湿潤で、亜熱帯林が極相として発達するには絶好の地域となっている。東南アジアの熱帯多雨林から日本西南部の暖温帯林の移行帯、そこに南西諸島は位置している。南西諸島における亜熱帯林の林木種数は90種/ha以上で熱帯にも比肩しうる種の豊富さである（ばらつきはあるが熱帯林の場合は 100 種/ha 以上、暖温帯林の場合は 40 種/ha 程度）。種組成的には熱帯要素が観察されるが、群集構造の特徴（例えばサイズ構造等）は、暖温帯の常緑照葉樹林と類似している。このように生態学的に貴重な亜熱帯林であるが、それがどのように維持されているのか、といった動態に関してはほとんど解明されていない。長寿命の樹木が構成する森林の動態研究には、長期継続研究が不可欠である。したがって私たちが行っている研究は、永久調査区を森林に設定し、樹木個々の生長と枯死を長期観察することが基本となる。亜熱帯林を構成する各種がどのように分布し、さらには各種個体群の総体である群集の種多様性はどのように維持されているのか、これに答えることが最終的な研究目的である。一方、南西諸島における森林群集のもう一つの特徴は、生物学的に貴重な地域であるにも関わらず、人為活動によって衰退・劣化しつつある、という事実である。例えば、沖縄島北部における森林保全の問題（いわゆるヤンバル森林伐採問題）は、大きな自然保護問題にもなっている。南西諸島の亜熱帯林では、複雑な地形に対応した各種の特異的な空間分布があり、それはランドスケープレベルで観察した場合、多様な景色として観察できる。同時に、森林伐採による人為影響は、伐採年代に応じた様々な発達段階の林分をモザイク的に配置し、景観の多様性を助長している。地形傾度に沿った、土壌の養分・水分条件など物理的環境条件の異質性、および人為影響、これらが亜熱帯林の種多様性に及ぼす影響を定量化することが当面の課題である。言うまでもなく、これらの成果は亜熱帯林の保全と持続的利用を図るための、生態学的な基礎情報にもなるはずである。

第31回

2002年6月10日

総合教育研究棟201講義室

「島」としてのブルターニュ

梁川英俊
（鹿児島大学法文学部）

フランス北西部の半島に位置するブルターニュ地方は、フランスの中でも独特な地理的・歴史的・文化的条件をもつ地方として知られている。

まず、三方を海で囲まれ、周辺海域には大小あわせて 1000 近い島を抱える、農業国フランスでは珍しい海洋文化圏である。古来海運業で栄えたこの地方の特異性を、19 世紀の歴史家ミシュレは、「ブルターニュはほとんどひとつの島である」と表現した。現在でも 200 近い漁港を抱え、特に南岸部にフランス有数の良港（ロリアン、コンカルノー、サン・ナザール、ドゥアルヌネ等）を有するこの地方は、漁業人口でフランス全体の３分の２、漁業量では５分の２を占めている。

一方、地形的に見れば、なだらかで肥沃な平野部の続くフランスの他の地方とは対照的に、ブルターニュの内陸部は農耕に不向きな痩せた土地が大半を占め、沿岸部もごつごつした花崗岩や切り立った断崖など独特な景観が目につく。実際、この地方はフランスで最も開発の遅れた貧しい地域として、国全体の近代化から大きく取り残されてきた。

歴史的に見れば、ブルターニュはもともとブリテン島のケルト人を祖先とし、1532 年にフランスに併

合されるまで独立国であった。さらに言語的にもフランス語とはまったく出自を異にするケルト系のブルトン語という独特の言語を有し、その文化的背景も多くフランスの一般的なそれとは異なっていた。が、「一にして不可分の共和国」を唱える革命後のフランスで、こうした独自性が有利にはたらくことはなかった。逆に、この地方はいわばフランスの国内植民地としてさまざまな苦汁をなめさせられることになる。

こうした負の歴史を背景に、20世紀初頭、ブルターニュに「地域主義」が生まれる。しかし爆弾闘争など過激な手段に訴える自治主義者の行為は、一般の支持を得るには遠かった。ブルターニュの独自性の主張はつねにマイナーなものにとどまってきたのである。

ところが、特に1990年代以降、この地方におけるアイデンティティーの主張は俄かに活気を帯び始める。ブルトン語復権運動、ウェールズやアイルランドを始めとする他のケルト圏の国との連帯、ブルターニュ・ブランドの確立など、その傾向は単に文化的側面のみにとどまらず広く政治・経済にも及び、いまやフランス全体の支持を得るにいたっている。こうした背景には、ミッテラン以後のフランスにおける地域政策の変化、EU統合の進展などがあると思われるが、いずれにせよ、今後のフランスないしはEUの地域政策全体を占う上でも、この地方の動向には目が離せない。

第32回

2002年6月15日（土）

9:30-16:30

総合教育研究棟203講義室

総合研究プロジェクト研究成果報告会

1．南西諸島

課題1：小島嶼における人間活動系（9:30-10:00）

1）徳丸亞木（法文学部）：南西諸島島嶼社会における女性霊性の民俗学的研究

2）小片　守・折原義行（医学部）：島嶼地区における自殺の現状と推移—自殺を予防するための方法の確立を目指して—

課題2：小島嶼における自然環境系（10:00-11:30）

3）James Davis Reimer・塚原潤三（理学部）：Evidence of seasonal and geographical variations in endosymbiotic zooxanthellae conditions due to temperature in an encrusting anemone (Zoanthus pacificus)

4）根建心具（理学部）：屋久島の花崗岩と種子島の砂鉄

5）北野元生・平野真人（歯学部）・吉田愛知（医学部）・石原尚・梅村理恵（歯学部）服部正策（東京大

学）・小田直子・千々岩崇仁・大野素徳（崇城大学）：ハブ咬傷による骨格筋肉壊死に対するハブ血清中に含まれるハブ毒インヒビターの効果について

（休息10:45-11:00）

6）坂巻祥孝（農学部）：離島の害虫相データベース２　―データベースの体系構築をめざして―

7）小針　統・幅野明正（水産学部）市川敏弘（理学部）：鹿児島湾におけるクロロフィルa濃度の季節変化

課題３：小島嶼における人間と自然の相互作用（11:30-12:00）

8）久保田康裕（教育学部）：亜熱帯森林群集における地形傾度に伴う林木多様性パターン

9）中西良孝・藤橋大輔・萬田正治（農学部）：鹿児島県トカラ列島における在来家畜の意義：口之島野生化牛保護のための生息調査

２．ミクロネシア連邦ヤップ島およびウリシー環礁

課題１：小島嶼における人間活動系（13:00-13:30）

1）桑原季雄（法文学部）：ウリシー環礁における伝統文化と社会変化

2）田島康弘（教育学部）：ヤップ州ウリシー環諸島民の移住　－モグモグ島の場合－

課題２：小島嶼における自然環境系（13:30-16:00）

3）河合　渓（多島研）：ミクロネシア連邦ヤップ州ウリシー環礁に生息するキバアマガイ Nerita plicata への環境要因の影響

4）石黒悦爾・柏木純孝・金剛仙太郎（農学部）・菊川浩行・東　政能・吉永圭輔・福田隆二（水産学部）・森山雅雄（長崎大学）・前田健二郎（琉球大学）：衛星データを用いたウリシー環礁の環境モニタリング　－ウリシー環礁内とヤップ島沿岸部の水深推定－

5）一谷勝之・疋田　恵・鎌田則幸・永山　宇（農学部）：小島嶼における有用植物の遺伝的多様性

6）遠城道雄（農学部）：ポーンペイ島およびヤップ島から導入したヤムイモの塊茎タンパク質の比較

7）遠城道雄・朴　炳宰（農学部）：ヤップ州ウリシー環礁における食生活と作物栽培

（休息14:45-15:00）

8）津田勝男・渡邊正男（農学部）：昆虫相から見たヤップ州ウリシー環礁の自然生態系

9）寺田竜太（水産学部）・Nishihara, Gregory. N.（連大）・東　輝・野呂忠秀（水産学部）：ヤップ島およびウリシー環礁の海藻相と生育環境

10）野呂忠秀（水産学部）・Nishihara, Gregory. N（連大）・寺田竜太（水産学部）：Ulithi 環礁におけるシガテラ魚毒現象の発生

11）田浦　悟（遺伝子）・朴　炳宰（連大）・一谷勝之（農学部）：ヤップ州におけるヤムイモの遺伝資源

課題３：小島嶼における人間と自然の相互作用（16:00-16:30）

12）野田伸一（多島研）：ウリシー環礁における蚊分布調査

13）冨永茂人・山本雅史・河野留美子・朴　炳宰（農学部）：ヤップ本島およびウリシー環礁に分布するカンキツ類の分類

第33回

2002年7月29日

総合教育研究棟 201 講義室

Ethnobotanical Study on Zingiberaceae in Indonesia

Soedarsono Riswan

(Kagoshima University; Research Center for the Pacific Islands)

Plants have usually played an important role in the economic, industrial and cultural life of people throughout the world. Indonesia as the biggest tropical forest country in Indo-Malayan region or the 2nd biggest in the world after Brazil is very rich not only in its biological diversity, but also in the diversity of its ethnic groups. Zingiberaceae is a very important plant family in Indonesia, since it had long cultural life, i.e. with Javanese tribe as traditional medicines, and also had an economic value. From taxonomic point of view, this family is also an interesting family, due to the fact that it is a complex and big family, and that is has a

pantropical distribution. The revision of Malesian Zingiberaceae is still in progress and not yet finished.

Based on the field and literature studies, the traditional uses and the geographical distribution of genera and species of Zingiberaceae in Indonesia will be discussed in this lecture. The results show that 60 species belonging to 11 genera have been used for many purposes and particularly used as medicinal plants, spices and condiments. The most economic genera are *Curcuma*, *Zingiber*, *Amomum*, *Etlingera* and *Alpinia*. The review studies of Zingiberaceae in Indonesia found that the total number of genera and species of Zingiberaceae is 20 and 386 respectively. The three biggest genera with total number of species are *Alpinia* (92), *Amomum* (66) and *Riedelia* (62).

多島研海外調査

イスタンブール～ギリシャ

(2002年2月25日～3月10日)

イスタンブール編

青山　亨

(多島圏研究センター)

多島研専任教官3名による今回の調査旅行をおこなうにあたって、青山が先行して出発し、イスタンブールにおける単独調査をおこなった。これは、青山の専門領域である東南アジア海域世界におけるイスラーム世界との交流に関する知見と資料を得るためである。イスタンブールは、古代ギリシアに遡る長い歴史を誇るが、15世紀以降、オスマン・トルコ帝国の首都として、中国から主として東南アジア・南アジアを経て、ヨーロッパへ至るシルクロードの西側の交易拠点の一つとして機能した。そして、西方アジアにおけるイスラームの最大勢力であったオスマン・トルコ帝国は、イスラーム圏の東方のフロンティアであった東南アジアのムスリムたちにとって、イスラームの政治的・文化的規範としての機能を果たしていた。なお、トルコ共和国独立後に首都はアンカラに移ったが、イスタンブールがトルコ最大の都市として商業の中心であることには代わりは無い。事実、トルコへの国際航空路線はすべてイスタンブールと結ばれているのである。

鹿児島から大阪に移動し、関西空港近くのホテルで一泊したのち、翌25日、12時30分発ソウル経由イスタンブール行きトルコ航空047便で出国した。ソウルでの立ち寄りを含めて15時間ほどの長旅であった。ソウルで多数の韓国人観光客が乗りこんできたことは、韓国の経済的繁栄をよく示している。イスタンブールに着いたのは、同じ日の20時40分であった。比較的厳しい入管と通関手続きを予想していたのだが、書きこみ書類もなしの簡単な入管手続きとフリーパスの関税通過には拍子抜けであった。トルコは20年来、ヨーロッパ連合(EU)への参加を希望しつづけており(少数民族クルド人の扱いが障害となって拒否されつづけている)、出入国手続きの簡便化はこのような流れに位置付けられるのかもしれない。イスタンブール市内までタクシーで30分ほどで移動した。宿泊したプレジデント・ホテルは、設備的には古くなっているが、格式のあるホテルであり、歴史的建造物が集中する旧市街の中心にあって、便利がよい。イスタンブールは、黒海と(地中海に連なる)マルマラ海を結ぶボスポラス海峡の両岸にまたがっている。海峡の西側がヨーロッパ、東側がアジアということで、イスタンブールは二つの大陸にまたがる町として知られている。もっとも、海峡の幅は意外と狭く、海峡にかかる橋も、明石大橋と比べれば技術的には容易と思われた。しかし、緩やかな曲線を描く丘が海に滑り込み、そこに町並みが広がる様は見ていて心地よいものがあった。ヨーロッパ側のイスタンブールは、内陸にくさび状に割って入る金角湾によって、さらに南北に分断されており、北側には近代的なビルが林立する新市街地、

南側が古くから発達した旧市街である。市街地のあちこちにモスクのドームと突き刺さるように細い尖塔が目に入るところが、イスラムの都市らしい風情をもたらしている。

イスタンブールでの第１日には、考古学博物館(Archaeological Museum)、古代ローマの地下貯水池(Basilica Cistern)、アヤ・ソフィア博物館(Aya Sofya Museum)、スルタンアフメット・モスクを見学した。イスラーム化する以前のトルコにおいて、ギリシア時代に始まりローマ時代を経てキリスト教文明に至る長い伝統が根付いていたことが、オスマン帝国における宗教的融和政策の根源にあったことを理解できた。

第２日には、トプカプ宮殿博物館(Topkapi Palace)、トルコ・イスラム美術博物館(Museum of Turkish and Muslim Arts)、モザイク博物館(Great Palace Mosaic Museum)を訪問した。今回の調査の中心であるトプカプ（Topkapi。ただしｉは、上に点がないトルコ文字独特のｉ。これはウの音に近いので、トプカピと読むのは誤り）。トプカプ宮殿には、膨大な中国陶磁器のコレクションがあり、シルクロードの中継地であり、かつ東方の産物の大消費市場であったイスタンブールの状況をよく理解することができた。日本の陶磁器も数が少ないものの優れたものが保存されている。これらの陶磁器の多くは東南アジアを経由して海路で西方へもたらされたのである。最終日には、スレイマネ・ジャミ・モスク(Suleymane Camii)。ジャミはトルコ語でモスクを意味する）と大バザール(Grand Bazar)を見学した。大バザールは、全体がアーチ屋根のついた通路でつながった巨大な商店街である。市場を意味するアラビア語の「バザール」は、イスラームの普及とともに東南アジアにも伝わり、インドネシア語の「パサル」の語源ともなった。イスラームの普及が長距離交易に基づく商業と深く結びついていたことを示している。

この日の夕方、17 時 5 分発のトルコ航空1849便でアテネに移動し、18時30分に到着した。ここはすでにユーロ通貨圏である。空港からバスで市内へ向かったが、市街地へはいってからすさまじい交通渋滞に巻き込まれ、終点のシンタグマ広場まで 1 時間 30 分かかった。ここから地下鉄に乗って二駅めのオムニア広場へ移動し、アルコポール・ホテルにチェックインしたときには21時になっていた。この日の深夜、後発の野田センター長と河合助教授もアテネに無事到着し、青山と合流したが、昼夜を問わない慢性的なアテネ市内の渋滞は、アテネを移動の拠点とした我々の心配の種になり続けた。

マルタ大学訪問

河合　渓
（多島圏研究センター）

2002 年３月２日から３月４日まで多島研の野田教授、青山教授と私でマルタ共和国マルタ大学島嶼及び小国家研究所の Lino BRIGUGLIO 教授のもとを訪問した。BRIGUGLIO 教授は脆弱性指標(vulnerability index)を用いて小島嶼国家の経済を中心に研究しておられる経済学者である。私たちは BRIGUGLIO 教授と島嶼研究の現状と今後の方向性について意見交換をした後、この研究所における教育体制について説明を受けた。また、EU 参加へのマルタ共和国の取り組み、マルタにおける観光業の重要性、そしてヨーロッパにおける小島嶼国家であるマルタ共和国の立場などの説明は南太平洋における小島嶼国家の今後の方向性を考える上で興味深いものであった。

マルタ共和国は公用語がマルタ語と英語で大学における授業は英語が主である。マルタ大学は首都のヴァレッタにあり、落ち着いた町並みの中にある。また、この町は犯罪も少なく安全な町で人々もとても親切であった。英語習得の重要性を強く感じている日本人にとって、マルタ大学は英語を勉強するためにも、そしてそれを活かしたその他の分野の研究を進めて行くにもとても良い場所と思われた。この様なことを考えると、マルタ大学と日本との関係は今後より密接なものと成っていくと考えられる。

ミコノス島と与論島

野田伸一
（多島圏研究センター）

エーゲ海の中央部に円を描くように一塊になっている島々がキグラデス諸島で、その中でもミコノス島は観光地として人気が高く“エーゲ海に浮かぶ白い宝石”と呼ばれる。一方、与論島は薩南諸島の最南端に位置し、その美しさは“東洋の海に浮かび輝く真珠”と絶賛されている。ミコノス市と与論町は1984 年に姉妹都市盟約を締結し、与論町ではミコノス市との文化・物産・人的交流とギリシアのイメージを持った町づくりをめざした与論島ギリシア村が設立されている（写真１）。ミコノス島を訪れた目的は与論町の姉妹都市を視察することであったが、もう一つ目的があった。現在、与論島は健康の島･癒しの島への変身中で、その方策としてタラソテラピーの導入が図られている。タラソテラピーとはギリシア語の“海”とフランス語の“治療”をあわせた造語で、海洋療法と訳されている。このタラソテラピー施設を見学することも訪問の目的であった。

ミコノス島はアテネの東南 95km に位置し、面積 85km^2（徳之島とほぼ同じ、与論島の４倍）で、アテネから航空機だとわずか 45 分、フェリーでも５時間、夏期に運行される高速艇では３時間である。エーゲ海の島の代名詞といえるほどの人気の観光スポットである。島の人口は 5,000 人程度であるが、観光シーズンの夏期には観光客とホテルやペンションを営業する人でふくれあがる。ミコノス島を訪れたのは3月初旬で観光客はほとんどなく、観光シーズンにむけて宿泊施設の建築や整備が行われていた。ミコノス島の中心であるミコノス・タウンには青い海と白い町並み、日本人が思い描くエーゲ海の風景があった。宿泊したホテルの眼下に広がる建物は全て白く塗られている（写真２）、眺めているだけでゆったりとした気分になれた。ホテルから海岸に通じる道は細くて曲がりくねっており、両側が白い家と壁でさえぎられているために、外から島を訪れた者にとっては迷路である。道端では猫が寝そべり、ときどき野菜売りのロバにも出会った、道に迷いながら歩くのも楽しそうである。地図で位置を確認しながら海に出ると、海岸にはレストランが並び、港には色とりどりのずんぐりした小型の漁船が浮かんでいる、コンピュータの壁紙にしたいような美しい光景が展開していた。海岸ではミコノス・タウンのシンボルになっているペリカンのペドロも散歩していた。丘の方には、いたるところに小さな教会が見える。ミコノス島には大小 300 以上の教会があり、散策すると可愛らしい教会にであうことができる。

市庁舎を訪ね、ヴェロニス市長に面会した。ヴェロニス市長は昨年３月に与論町を訪れて姉妹盟約の更新をしており、我々を笑顔で迎えてくれた。海岸にあるレストランに招待してくれ、ワインを飲みながらの食事でいろんな話を聞くことができた。市長が建築家ということで、建築規制に関する話は印象に残った。ミコノスの景観を保つために、建物は2階建てまでしか許されていない。大きなホテルでも小さな建物に分かれている。また、建物の外観にも規制が取り入れられている。車が通れないほどの細い迷路のような道をそのまま残し、町の中への車の乗り入れを禁止し、伝統的な町並みを大事にしている。地域おこしは道を広げ、車を走らせることばかりではないことを示す例であろう。レストランの前に並べられたテーブルで食事している我々や市長にいろんな人が声をかけて通りすぎていく、ワインを絞った残りを蒸留して作ったというとんでもなく強い酒も差し入れられた。３時過ぎから始めた食事は日暮れまで続き、ワインが何本も空になってしまった。

タラソテラピー施設を見るために訪れたのは、ミコノス島では規模が大きく白砂のビーチが美しいエリア・ビーチにあるロイヤル・ミコニアン・ホテルであった。ミコノス島では 11 ～３月中旬はほとんどのホテルやペンションが閉まってしまう。このホテルも営業を休み、タラソテラピーのための海水プールを建設中であった。タラソテラピーは海辺の気候と海水を様々な手法を用いて積極的に健康増進や美容、そして機能回復や治療目的で活用する療法であ

る。タラソテラピー施設は、リゾート型・シークリニック型・健康増進型・都市型それにこれらの複合型に分けられる。訪問したホテルの施設は典型的なリゾート型であった。この５つ星ホテルには既にリラクセーションを目的としたジム・室内プール・サウナ・スチームバス・ジャグジーなどの立派な設備が整っているが、今年の夏からいろんな機能を持った海水プールを作り、タラソテラピーを始めようとしていた。このホテルの設備はとても立派で、日本ではこのような豪華なリゾート型より地域に密着した健康増進型のほうが現実的であるように思われた。案内してくれた責任者のダクティデス支配人のエネルギーに驚かされた。ホテルは休業中でも絶え間なく携帯電話がかかり、工事の指示も出していた。いろんな事に対応しながら大変なスピードでホテル内の案内をしてくれた。

今年、鹿児島タラソテラピー研究会が発足し、２月に発足会とクレタ島のアンゲロプウルウ女史の特別講演が鹿児島市で行われた。さらに、本年7月には鹿児島タラソテラピー研究会 in 与論がホテル・プリシアリゾートヨロンで開催され、100名以上が島内外から参加し活発な討論が行われた。研究会に先立ち、アクアエクササイズ教室のデモンストレーション（写真３）と海水バスのオープニングセレモニー（写真４）が行われた。これで与論島には与論コーラルホテルに続いて２ケ所目のタラソテラピー施設がオープンした。与論島では離島の個性豊かな自然や風土を活かして自己の持つ生命力や活力を甦らせ、心身ともに生き生きとして健康になるアイランドセラピー構想を推進しており、タラソテラピーもこの一環である。専用の大規模なタラソテラピー設備を作るのではなく既存の設備を利用する、施設に頼らない方法は１つのモデルとなるものであろう。

写真１．ギリシアをイメージして作られた白い建物.

写真２．白い町並みのミコノス・タウン.

写真３．海水プールでのアクアエクササイズ

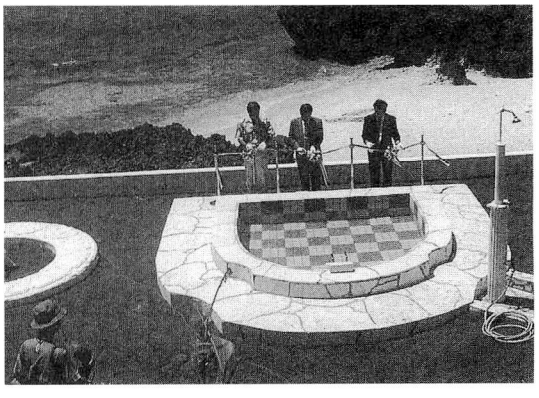

写真４．タラソテラピーのための
海水バスのオープニングセレモニー

多島圏研究センター専任・兼務教官の海外出張及び研修記録
(2002年２月～2002年８月)

所属	氏名	期間	国名	用務
教育学部	田島康弘	2002/2/20-2002/3/28	イギリス	開発教育の導入による地理教育の改善を目的とした関係機関訪問および資料収集
多島研	青山　亨	2002/2/25-2002/3/9	トルコ・マルタ・ギリシャ	資料収集、情報・意見交換および施設見学
多島研	河合　渓	2002/2/28-2002/3/10	マルタ・ギリシャ	資料収集、情報・意見交換および施設見学
多島研	野田伸一	2002/2/28-2002/3/10	マルタ・ギリシャ	資料収集、情報・意見交換および施設見学
法文学部	黒田景子	2002/3/3-2002/3/13	タイ	タイ国における資料収集とその調査報告
理学部	根建心具	2002/3/10-2002/3/31	アメリカ	月惑星科学国際会議出席
理学部	鈴木英治	2002/3/10-2002/4/7	インドネシア	インドネシア生物多様性保全のための研究と指導
多島研	青山　亨	2002/3/12-2002/3/20	カンボジア	現地調査および資料収集
水産学部	野呂忠秀	2002/3/17-2002/3/28	フィリピン	JICA毒性赤潮モニタリングプロジェクト終了時評価調査
理学部	市川敏弘	2002/3/24-2002/3/31	マレイシア	日本学術振興会の事業による共同研究の実施
多島研	青山　亨	2002/4/1-2002/4/6	フランス	「インドネシアおよびマレイシアの翻訳の歴史」の国際ワークショップ
多島研	青山　亨	2002/4/7-2003/1/9	インドネシア	東南アジア島嶼部における歴史文化に関する調査
水産学部	前田広人	2002/4/25-2002/5/23	ハワイ西方海域	微生物学的海洋調査
水産学部	東　政能	2002/4/25-2002/6/6	ハワイ西方海域	乗船実習
教育学部	八田明夫	2002/5/11-2002/5/20	中華人民共和国	中国・長春市・東北師範大学との学術交流および理科教育と青少年科学技術教育の共同研究
水産学部	寺田竜太	2002/5/22-2002/6/2	アメリカ	第10回有用藻類の分類および多様性に関する国際ワークショップ参加
法文学部	尾崎孝宏	2002/6/3-2002/6/11	中国内モンゴル自治区	内モンゴル牧民の経済状況に関する現地調査
法文学部	黒田景子	2002/6/10-2002/6/18	タイ	国際学会参加および発表

所属	氏名	期間	国名	用務
理学部	鈴木英治	2002/6/22-2002/7/7	ブルネイ	ボルネオ島熱帯雨林の多様性維持機構の研究
水産学部	市川　洋	2002/6/26-2002/6/30	中華人民共和国	琉球海流系に関する研究打ち合わせ
多島研	河合　渓	2002/6/24-2002/7/4	カナダ	情報収集および学術交流
多島研	野田伸一	2002/6/24-2002/7/4	カナダ	情報収集および学術交流
多島研	日高哲志	2002/6/24-2002/7/4	カナダ	情報収集および学術交流
農学部	米田　健	2002/7/20-2002/7/25	マレイシア	熱帯雨林からの分解系から出る二酸化炭素フラックスに関する研究
水産学部	小針　統	2002/7/20-2002/7/28	中華民国（台湾）	国際学会（第8回国際カイアシ類会議）での研究発表
理学部	大塚裕之	2002/7/21-2002/8/8	インドネシア	ジャワ島における学術調査ジャワ原人化石の発掘調査および形態学的研究
理学部	鈴木英治	2002/7/21-2002/9/1	インドネシア	ボルネオ島熱帯雨林の多様性維持機構の研究
農学部	衛藤威臣	2002/7/26-2002/8/20	トルコ	ニンニク祖先の解明に関してトルコ中部にての調査
法文学部	山田　誠	2002/7/29-2002/9/4	ドイツ・フィンランド	ドイツ介護保険の実態調査および国際財政学会出席
理学部	根建心具	2002/7/30-2002/8/23	オーストラリア	原始地球の遊離酸素とバイオマーカーに関する国際共同研究
法文学部	尾崎孝宏	2002/8/2-2002/9/1	中国内モンゴル自治区	オアシスプロジェクト現地調査
農学部	橋本文雄	2002/8/9-2002/8/18	カナダ	第26回国際園芸学会議に出席、発表
総合研究博物館	落合雪野	2002/8/11-2002/9/1	インドネシア	ウォーラセア海域沿岸地域における生物資源利用と変容の調査および資料収集
理学部	市川敏弘	2002/8/12-2002/8/17	大韓民国	国際生態学会シンポジウム出席
農学部	濱名克己	2002/8/18-2002/8/27	ドイツ・オーストリア	第22回牛病学会参加・発表およびウィーン大学にて研究交流
多島研	野田伸一	2002/8/18-2002/9/1	ヴェトナム	（拠点大学交流共同研究）土壌媒介寄生虫病に関する研究
法文学部	西村　知	2002/8/18-2002/9/26	フィリピン	科研費研究課題に関する調査
教育学部	木下紀正	2002/8/19-2002/8/28	中華人民共和国	物理学基礎教育改革に関する国際物理教育会議、2002日中友好科学技術創新研修会、野外巡検および東北師範大学との科学教育交流

所属	氏名	期間	国名	用務
教育学部	八田明夫	2002/8/22-2002/8/28	中華人民共和国	2002日中友好科学技術創新研修会、野外巡検および東北師範大学との科学教育交流
総合研究博物館	大木公彦	2002/8/31-2002/9/11	オーストリア	環境と微化石、微生物、メイオベントスに関する国際学会出席およびトリエステ周辺巡検

平成14年度外国人客員研究員

平成１４年度外国人客員研究員としてフィジーにある南太平洋大学経済学部の Biman C. Prasad（ビマン Ｃ プラサド）上級講師が９月に着任しました。任期は来年１月までです。専門は南太平洋諸島の国々の経済開発問題と環境問題です。

多島研だより　No. 43 平成14年９月30日発行

発行：鹿児島大学多島圏研究センター
〒890-8580　鹿児島市郡元１－２１－２４
TEL：099(285)7394　FAX:099(285)6197
E-mail:tatoken@kuas.kagoshima-u.ac.jp
WWW: http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/